

〈自由論題〉

〈フィールド報告〉街角から考えるブラジル社会の光と影

横 田 香穂梨

ブラジルの地域的多様性：「北東部では大女、南部では小人」になれるブラジル

筆者が研究対象としているブラジルは、日本の約 23 倍の広い国土を持ち、人口は 2 億 1,000 万人を超え（世界銀行 2023 年）世界第 7 位、さらに国土面積も世界第 5 位の規模である。それだけに、地域による人種構成や人々の気質に至るまで実に多彩な国である。筆者は、300 年以上の長きに及んだポルトガル植民地時代（1500–1822）に砂糖きびの奴隷制プランテーションが盛んだった北東部で研究を行っている。地域的多様性とは何か。例えば、アフリカ系の人々の割合が高い^①北東部にいる時は、筆者は、身長 166 センチの自分より背の低い男性も多い環境に置かれ自分が大女であることを自覚する。他方で、ドイツ系移民やイタリア系移民の子孫の多い南部に行くと、今度は、男性だけでなく女性でも自分より背が高く体格もよい人が珍しくないため、インタビューや講演の際に大勢の人たちに囲まれると圧を感じて若干怖くなり「小人」気分を味わうことになるといった具合である。自分が「いる場所」によって周囲と比べた身体的な位置づけが違う感覚になるのは日本ではありえないことであろう。

ブラジル北東部（Nordeste：ノルデスチ）は、社会格差と地域格差が大きなブラジルにおいて、「ブラジルの貧困地帯」と形容されることがある。歴史的な経緯も相まって、北東部では貧困率が特に高く、ブラジル国内の貧困層が集中している。けれども、ブラジルの歴史が始まった地域でもある北東部^②を抜きにして、ブラジルの文化やブラジルらしさを語ることはできない。そこで、本稿では、主に、日本ではあまり知られていないブラジル北東部^③において、筆者がこれまでフィールドワークの合間に街角で見聞きしたエピソードを紹介し、ブラジル社会の光と影について考えてみたい。

ラテンアメリカの人々の普段着の魅力

先日、当研究所の運営会議の合間の雑談の際に、当研究所で同じくブラジル研究をしている T さんが、「学生に授業で見せられるブラジル映画がない」と嘆いていたことがあった。同感である。名作は数多あれど、暴力が露骨に描かれていることも珍しくはないからである。筆者も、授業での使用を検討し、国際的にも話題になった某映画の DVD をネットで購入しようとしたところ、画面に現れた「ノンストップ・バイオレンス」という、暴力を「売り」にするかのようなコピーを見て、ブラジルの社会問題に鋭く切り込んだ意欲作がそのような文脈で日本では消費されうるのだと考え込んでしまったことがある。この時は話題が他に移ってしまったので口を挟むことは控えたが、もし私が T さんの発言に後付けすることが許されるならば、「映画ではなくドキュメンタリーで、普段着のラテンアメリカの人々が描かれている場面を観たら、学生はまず間違いなく夢中になる（＝ラテンアメリカの人々のことが大好きになる）」というひとことをぜひ加えたいと思う。

筆者は、主にラテンアメリカ関連の授業を本学内外で担当しているが、自由論題の期末レポートに「アメリカの」奴隷制に関するレポートが提出されることもある位、学生におけるラテンアメリカ地域の認知度は悲しくなるほど低い。にもかかわらず、「ラテンアメリカ地域」にはアメリカやカナダは含まれないという事実すら認識していない学生であっても、どうやら「気さくで人懐っこく、開放的」なラテンアメリカの人々の魅力が自然と伝わっているらしいことは、ドキュメンタリーの画面を目で追う学生の目の輝きを見れば容易に肌で感じるができる。

「ブラジルらしさ」を凝縮したノルデスチ

筆者は、南東部で、初対面の人（友人の友人）

の結婚式に出席したこともあるし、子どものような好奇心で無邪気に日本語の文字について質問しまくるタクシーの運転手さんと車中でずっと目が合い続けハラハラし続けた記憶もある（つまり、運転手さんは、前方ではなく後部座席の筆者の目を見て話しながら車を走らせていたのである）。要するに、気さくで人懐っこく、フレンドリーなブラジル人は、ブラジル各地に生息しているのだが、その密度は北東部で最も高いということに、ノルデスチを知る方々は激しく同意して下さるだろうと確信する。筆者の友人には、出会ったのはブラジルの北東部だけだど育ったのが北東部以外という人も多いのだが、ある時、Carioca（カリオカ：リオっ子）^{iv)}の友人の両親が、友人を訪ねてペルナンブコ州の州都レシーフェまで来て、一緒に遊覧船に乗ったことがあった。遊覧船乗り場が少しわかりにくい場所にあったこともあって、道中、車の中から道行く人々に声を掛け、道を尋ねるが、いっこうにたどり着かない。。なんとか無事にたどり着いたその時、両親に向けて友人が放ったのは「この地域の人は親切で、教えたがりなんだけど、その情報はたいてい間違っているの！」の一言だった。

また、南部出身のGaúcho（ガウーシヨ：Rio Grande do Sul 州出身者）の友人のこんな弁もある。「ブラジルの国道（BR）はどこも穴が開いているけどノルデスチの穴は特にデカイ！（インフラのメンテナンス不足は道路に限らずよくあることだが、車に乗っていて突然ガタンと大揺れした時の原因はたいていこの大穴である）。この他、筆者の個人的な体感としては、「ノルデスチの人たちのハグ（abraço：抱擁）は他地域の人々のハグよりきつく（「ああ、潰れる」と思うレベル）、より『言葉の出し惜しみ』をしない」というのがある。平凡な容貌の筆者にも、別に口説くためでもないのに、日常会話の合間に「私の美しいバラ」「親愛なるプリンセス」等々、言われた方が一瞬ぎょっとするようなセリフが老若男女から次々と飛び出す。要するに、「気さくで人懐っこく、フレンドリーで世話好きだけど、ちょっと口が上手くていい加減、乱暴にまとめると、「ブラジルらしさをぎゅぎゅぎゅっと凝縮したのがノルデスチ」なのである。

筆者はフィールドワークの際の交通手段としてバスを好む。最大の理由は、目線が高くなり、街並みが見渡せるからであるが、忘れられない出来事がいくつかある。バスに乗ると、路上で大音響をかき鳴らすスピーカーから流れ出る夜9時台の連続ドラマ（Novela）の主題歌に合わせて、突如、乗客たちが体を揺らしながらの大合唱が始まった（日本の1983年度のNHK朝ドラ『おしん』放送時に銭湯が空になったというエピソードに匹敵するくらいの高視聴率を誇った2012年放送のTV Globoの“Avenida Brasil”の放送時であった）ことがあった。また、荷物の多い筆者がバスに乗ると、座っている乗客から次々に「持ってほしい？」という声がかかる。「お願いしたい」と即答すると、荷物は座っている乗客の膝の上に収まり、その乗客が降りると荷物はリレーされていき、次にその座席に座った乗客の膝に収まる。その人は「当然だ」と言わんばかりの顔をしてから筆者に微笑む。確かに、「ブラジルは治安が悪い」のだけれど、その一言で片づけられてしまうのはちょっと違う、と思わせてくれるエピソードではないだろうか。

「モーセの十戒的なもの」を見知らぬ人たちと共に渡った記憶

2016年にパラリンピックがリオで開催されていた当時、筆者はレシーフェにいた。パラリンピック開催を機に改善はみられたものの、まだ街のあちこちに、障害者にとって危険なゾーンが点在していて、市役所勤めの友人は、よく「バリアフリーじゃなくてバリアフルだ！」と皮肉っていた。あるとき、筆者はフィールドワークの帰路に、レシーフェでも屈指の交通量を誇る大通りをびくびくしながら渡ろうとしていた（ドライバーの運転は概して荒い）。その時、白杖をついた全盲と思しき青年2人が、前後に列を組んで（後ろの青年が前の青年の肩に手を載せて）同じ通りを渡ろうとしているのが目に入った。目が見えても渡るのには十分怖い通りをものともせず前へ前へと進む二人組の姿は目を引き、咄嗟に「一緒に渡りませんか？」という言葉が口をついて出た。一緒に渡ることになった次の瞬間、目に入ったのは、私の反対側に私と同じように立つもう1人の通行人の姿（二人組をサン

ドイッチしている状態)と横断歩道に向かって猛スピードでカーブしてくる車を最前線でさばっている人たちの姿だった。その数総勢 10 名ほど。即席のチームは、大通りを共に渡るミッションを無事クリアすると解散となり、皆、何事もなかった顔をしてそれぞれの日常に戻って行った。無論、だからと言って、「心のバリアフリーが実現している」などと簡単に括ることができないのがブラジルなのだが、しんどいことがあると、私は居合わせた見知らぬ人たちと渡ったあの「モーセの十戒的なもの」を思い出しちょっと元気になる。

ところで、筆者はブラジルの amigos (友人達) 界限では、“japinha brasileira (ブラジル人化した日本女子)”ということにされている。彼らにとっては、身近な日系人の方たちより筆者の方がフレンドリーで人懐っこいのだという。でも、ここだけの話、筆者は 20 代前半まで、「自分は対人恐怖症だ」と本気で信じていたほど人見知りが激しい人間である。まさかそんな自分がラテン化認定されるとは思ってもみなかった。

ある日、調査を終え帰宅してソファで TV を観ながらくつろいでいると、「シャイな人々」を取り上げたドキュメンタリー番組が始まった。登場するブラジル人たちは口々に言う。人前で話すのが苦手、人前で踊るのに緊張する等々。思わず「私と一緒にだ〜!」と叫ぶと、ルームシェアしている友人が「Kahori がシャイだなんて、そんなはずはない!」と怒り出した。挙句の果てに、「今日大学を出てから家に帰ってくるまで、どうやって帰ってきたか言ってみろ」とのたまう。「はあ?!」と思いながらも、記憶をたどりつつ、「えっと〜、果物屋のおっちゃんとしゃべって、文房具屋のおばちゃんとしゃべって、隣のおばちゃんとしゃべって (筆者が所属していた大学の付属病院で治療を受けるため、田舎から出てきて息子夫婦のアパートに滞在している隣室のおばちゃんの子息夫婦への愚痴をよく聞かされていた) …帰ってきた」と答えると、「ほら! Kahori はシャイじゃない!」となぜか友人は得意気である。超平和主義者の筆者が、誰かと本気で喧嘩しかけたのは、後にも先にも「(自分は) シャイなのか否か」をめぐる友人と意

見が分かれたこの時だけである (現時点では、「ブラジルにいる時はシャイではないらしい」と暫定的に結論づけている)。さらに、友人たちが折に触れ筆者に示す情の深さは、「ブラジルにおける『友情』の定義は、『迷惑をかけられる権利 (傍点は筆者)』なのではないか」と思えるほど、底なしに深い。筆者が授業で若い人たちにに向けて「みんなには、自分と違う『当たり前』を持っている人たちとたくさん出会ってほしい」と事あるごとに言うのは、日本とまるで違うブラジルの人たちとの化学反応から多くの恵みをいただいた自らの経験ゆえである。

ここまで、「ノルデスチ／ブラジル大好き」ということばかり述べてきた。以下では、対照的に、「人々が人懐っこくフレンドリー」だけでは語ることができないブラジル社会の別の顔、ブラジルが長年抱えてきた問題の奥深さを考えさせられたエピソードを三つ紹介し、本稿を終えたいと思う。

1. バス停でバスの行き先を通りすがりの女性に尋ねられる：就学率には表れない文字が読めない大人の存在

繰り返しになるが、筆者はバスを愛する。レシーフェのバス停に時刻表はない。大通りともなれば、いつ来るかしのれないバスは、到着時にはすでに乗客満載である上、目的地の異なるバスがひっきりなしにやってくる。自分が乗るバスを瞬時に見分け、「乗ります!」と意思表示をするために片腕をまっすぐ前に伸ばすサインを出す。ぼーっとしていると乗客 (筆者) を置いたまま出発しかねないから、バスの横腹を手で叩いて再度「乗るから置いていくな!」と意思表示しながら乗降ドアにたどり着き、ぎゅうぎゅう詰め乗客を押しよけてなんとか乗り込む。乗り込むまでのこの過程自体が一苦勞である (妙な達成感があるから筆者はこの「儀式」が決して嫌いではない)。

ある時、バス停で、見知らぬ女性に、「このバスはどこに行きますか?」と尋ねられた。「ん?」と思いつつ、「車体の、ほら、あそこ、前の方に書いてありますよ」と答えた。返ってきたのは、「私、文字が読めないの」の一言。

このときのことを思い出すと、自分の言動が恥ずかしくて変な汗がどっと出る。

ブラジルの就学率は1990年代のカルドゾ政権、2000年代のルーラ（2023年より三期目）政権の施策もあって改善したが、それは学齢期の子どもにおける識字率が向上したということ（この説明にも留保が必要だが本コラムでは略す）であって、かつて子どもだった人たち（大人たち）がみな文字の読み書きができるということの意味しない。しかも、筆者がノルデスチにたどり着いたのは、レシーフェ出身の教育思想家であったパウロ・フレイレ（1921-1997）の存在に導かれてのことだったのに。こうした現実には思いが至らず、自分は彼女に不本意な一言を無理やり話させてしまったのではないか。おそらくは仕事（質素だが清潔な身なりからは、エリート層の女性の家事育児をサポートしている家事労働者と推測された）のため複数のバスを乗り継いでいるであろう彼女は、仕事場にたどり着くまでに、毎日どれだけ多くの人たちと同じやりとりを幾度繰り返してきたのだろう。そのことを考えないわけにはいかなかった。

2. 道を教えてくれた女性に“Watch your bag!!!”と注意喚起され続ける

南東部のサンパウロ滞在中の出来事。バス停から滞在先への道がわからなくなり、同じバス停で降りて筆者のすぐそばを歩いていた二人の女性たちに何気なしに声を掛けた。二人は互いに見知らぬ人同士であり、一見したところでは、一人は中間層の女性（Aさん）、もう一人は貧困層の女性（Bさん）だった。

二人ともとても親切に教えてくれ、自分の行くべき道がわかりほっとした別れ際、先にその場を立ち去るそぶりをしたAさんが、なぜか英語で、「荷物に気を付けてね！（Watch your bag!!!）」と何度も何度も繰り返す。まだBさんにとりとめないおしゃべりを続けている筆者へのAさんの善意による密かな注意喚起なのだという事は、初めてのブラジル滞在中でポルトガル語もおぼつかなかった当時の筆者にもなぜかわかった。英語の意味はわかったけれど、その「善意」をそのまま受け取る気分にはなれなくて、曖昧に笑う筆者のことを「わかっていない」と

思ったらしいAさんが更に幾度も繰り返したもののだから、余計にいたたまれない気持ちになったのを覚えている。「道がわからずに困っている見知らぬ外国人（筆者）を助ける」という点では、同じ善意を共有していた二人。そのうちの一人（Bさん）が、社会階層的には上位者であるもう一人（Aさん）によって、外見のみにより、一方的に潜在的な「犯罪者予備軍」に仕立て上げられており、かつ、そのことに自分自身が無理やり秘密裡に同意させられたかのような後味の悪さ。電車や地下鉄、バスなどいたるところで降ってわいた見知らぬ人とおしゃべりに興じることはよくあるが、相手が貧困層の人と思しき場合、にぎやかだったはずの周囲がシーンと静まり返り、刺すような視線を浴びる中で、自分たちの存在が「異色の二人組で、周囲から浮いている」のだと実感した場面はこれまで何度かあった。

3. ブラジル社会における差別「不可視化」のメカニズムの解明を目指して

筆者に最も鮮烈な印象を残したのは、フィールドワークの帰りに大通りのバス停で目撃した出来事だ。

レシーフェでは、バスの車体後部の出っ張った部分に、路上で暮らしている子どもたちが華やかなジャンプをしてぶら下がり、ちょっとした移動のために短い区間をタダ乗りしていることがよくある（法的には無賃乗車に相当するであろう違法行為は半ば容認されており、車掌や運転手はわざわざ咎めて降ろさせるようなことはしない。ついでに書くと、路上で物売りをしている大人たちを、車掌がバス停で無賃乗車させてやり、その人が車内で商品のセールスを繰り返すことや、「うちの家内は病気で、子どもは○人いて…」と苦労話の口上を滔々と語り、小銭を稼いでから降りていくこともよくあった）。

その日、バス停にたどり着いたバスの後部にぶら下がっていた3人ほどの少年たちのうちの一人が、バス停に停止した時の振動で腕を離してしまったのか地面に落下した。

10メートルほど離れていたところを歩いていた筆者は、たまたまその瞬間を目撃し、慌てて駆け寄り少年に「大丈夫？」と声を掛けた。バ

ス停には、いつも通り、多くのバス待ちの人々がひしめきあっていて、筆者と同じ目をして駆け寄ってきたのはそばにいたもう一人の通行人だけで、他の通行人たちの目には、「タダ乗りした結果、バスの車体から落ちこちた貧しい家庭出身の子ども」の姿は文字通り「見えていない」のだった。愕然とした。少年と一言二言言葉を交わし、無事を確認して歩き始めた筆者の目に次に飛び込んできたのは、停止しているバスの運転席で、心底うんざりした様子で前に体を投げ出しながら両腕でハンドルを握りしめている運転手の男性の「死んだ魚のような目」だった。「貧しい人たちの厳しい暮らしや彼らの存在が無視されている日常」は、日の当たる場所で生きている人たちにとっては、「いつも通りの見慣れたもの」「できればかかわりあいになりたくない厄介なもの」でしかなく、そうした意識が、ブラジルの社会格差^{v)}の後景に脈々と受け継がれ温存されてきたという現実をまざまざと突き付けられた思いがした。

筆者の中では、今も、本稿の前半で述べてきた、筆者が大好きな「人懐っこくてオープンであっただい」(言うならば、世界公認の)前向きなブラジル人像と、後半の3つのエピソード(特に2と3)で述べたような、歴然とした社会格差が存在するブラジルの現実とのギャップはあまりに大きすぎて、その世界線はどうしても交わらない。数値化できる暴力ではないかもしれないけれど、この種の差別や格差、存在の不可視化という、人間の尊厳を根底から傷つけうる行為を、人情に溢れたブラジルの人たちが半ば容認し長年にわたって放置し続けてきたのはなぜなのか^{vi)}。

筆者が研究を続けているのも、たぶん、ブラジル社会における社会格差や差別が「不可視化」されるメカニズム、ブラジルの光と影の接合部分の核心にある、そのメカニズムを壮大なブラジル史の中で自らの言葉で解き明かしたいからなのだろう。

註

- i) 上述の通り、ブラジル北東部は、砂糖きびのプランテーション栽培が大々的に行われた地域であり、当時砂糖きびの栽培や刈り取り、製糖作業という過酷な肉体労働の担い手になったのは、アフリカ大陸から奴隷船で連れてこられた人々であった。ちなみに、ブラジルにおいて奴隷制が廃止されたのは1888年であり、世界で最後に奴隷制を廃止したのがブラジルである。こうした歴史的経緯により、ブラジル北東部は今日も、アフリカ系のルーツをもつ住民の比率が高いという特徴を持っている。本稿で取り上げる事例の多くが依拠する筆者のフィールドは、このブラジル北東部に位置するペルナンブコ州の州都レシーフェである。
- ii) ブラジル最初の首都は北東部バイーア州のサルバドールであった。
- iii) 「リオのカーニバル」のリオデジャネイロでも、日系人が多く住むサンパウロでもないブラジル北東部が日本のマスメディアに取り上げられたのは、筆者の記憶の限りでは、2014年のFIFAサッカーW杯の日本初戦がペルナンブコ州の州都レシーフェで行われたとき位である。
- iv) リオデジャネイロ出身者のこと。「carioca」という語彙には、リオデジャネイロに並ぶブラジルの主要州サンパウロ州の出身者である「勤勉だが頭の固い」「paulista」(サンパウロ州出身者)との比較において、「自由闊達で洗練され人生の楽しみ方を知っている」リオデジャネイロの人々の気風を肯定する響きがある。ブラジルでは、多くの人が自身の出身州や市に対し、強い帰属意識を有し、それがアイデンティティのよりどころのひとつとなっている。
- v) 例えば、オックスフォード大学の研究者が中心になって運営されてきた“*Our World in Data* (<https://ourworldindata.org/grapher/economic-inequality-gini-index> 2024年8月31日最終更新)”という国際統計比較サイトによると、ブラジルのジニ係数は、0.52(2022年)とされており、ワースト1位のコロンビアの0.55(2022年)に次ぎ、ザンビアの0.52(2022年)と同列2位の高さとなっている。
- vi) 日本でもよく知られ、「にぎやかで陽気なブラジル」そのものにみえるリオデジャネイロのカーニバルでさえ、奴隷制というより組織化された合法的な社会格差が存在した植民地時代の「奴隷たちのガス抜き」に起源があると説明されることがある。例えば、ニューズウィーク日本版ホームページ「南米街角クラブ(2022年1月14日公開) 島田愛加『ブラジルにカーニバルは必要ないのか』」(<https://www.newsweekjapan.jp/worldvoice/shimada/2022/01/post-28.php> 2024年8月31日最終更新)。現在のブラジルでは、社会格差は解消に向けて

官民一体となった取り組みが必要であるという認識が少なくとも表向きは共有されている。しかしながら、他方では、社会格差を温存させるためにフォーマルインフォーマル様々なメカニズムが存在し続けてきたと分析することもできるだろう。2020 年 5 月には、アメリカのミネソタ州で、アフリカ系の男性ジョージ・フロイド氏が白人の警察官によって首を圧迫され死に至る事件が発生した。それをきっかけに世界に広がった黒人差別への抗議運動 Black Lives Matter 運動のブラジルへの反響、その文脈の中でブラジル国内で改めて注目されることになった Racismo Estrutural（構造的人種主義）の議論のその後の動向については、別の機会に検討したい。

（横田香穂梨・当研究所特任研究員）

本研究は、JSPS 科研費 20K12355 の助成を受けたものです。